

# いのちのふる里

沼津芹沢光治良文学愛好会 会報

2023年6月

巻頭論文 企画展「光治良の欧州体験－『孤絶』『離愁』  
と『巴里に死す』－」について 劔持直樹 p.1  
植松靖博さんの思い出 p.4  
Impressions 会員からのメッセージ p.5

植物学者牧野富太郎と祖父前田千寸との関係 天野博人 p.6  
30年、100年、127年、この機会に 芹沢光治 p.6  
この一年をふり返って 五十嵐由子 p.7  
活動報告と新年度計画・予算 事務局 p.8

## 企画展「光治良の欧州体験－『孤絶』『離愁』と『巴里に死す』－」について (注) 劔持 直樹 ※

(注)本稿は、令和4(2022)年12月17日に芹沢光治良記念文化財団の依頼によりサロン・マグノリア(芹沢光治良自宅、東京都中野区東中野)において行った出張講座での講演の一部を再構成したものです。

芹沢光治良の生誕地である静岡県沼津市我入道に、沼津市芹沢光治良記念館があります。

当館では、令和5(2023)年5月31日まで、表題の企画展全2回を開催中です。

令和3(2021)年4月に、作家・芹沢光治良のフランス留学時期を基に創作した『孤絶』が小学館から復刊されました。また、昨年度は代表作『人間の運命』で描かれた、明治から昭和にかけての「時代」を特集した展示を開催しました。この作品では、あえて留学時期については描かれていません。この内容に続く展示として今年度は、改めて光治良自身のフランス留学時期をとりあげ、また、その時期を基に創作した作品『孤絶』、その続編『離愁』と『巴里に死す』を特集することとしました。第1回では、渡仏から結核罹患を経てフランス・オートヴィルへ療養に旅立つまでと『孤絶』を、開催中の第2回ではオートヴィルでの療養から帰国までと『離愁』『巴里に死す』を取り上げました。

### 1 光治良の留学

光治良は官吏を辞めて、大正14(1925)年から昭和3(1928)年にかけてフランスへ留学しました。当時は飛行機がないので、船で約40日間かけて途中、上海、香港、シンガポールなどを經由してフランスに向かいました。

留学当時の出来事を知る手がかりとして、光治良や妻・金江が記した絵葉書があります。約300枚近くが芹沢家に残されており、このうち主なものをピックアップして企画展全2回に分けて展示しています。主に金江の実家・名古屋の義父母である藍川清成、しむ宛のものです。内容はその時々での生活の様子や日々思ったことなどが詳細に綴られています。

パリでは、パリ大学で経済学を学ぶ傍ら、多くの文化人と交流を持ちました。また、日本では留学前に知り合った人も多くいます。その中で今回の展示で特に紹介したいのは、名古屋出身で、東京帝国大学経済学部社会学科で副手を務めていた社会学者・下出隼吉です。今回、下出のご遺族から当館に芹沢光治良が記した書簡や葉書7点が寄贈されました。今回の展示で一般初公開となった資料です。長編の随想録『レマン湖のほとり』(昭和50(1975)年新潮社)には、名古屋で藍川清成が下出隼吉の父・下出民義に世話になったという縁があり、留学に際して東京でのお別れ会で初めて知り合ったことや、下出から、ある依頼をされたことが書かれています。下出は、社会学の研究をしていた関係で、様々な原書を収集していました。依頼は、その一環で、光治良にオーギュスト・コント著『実証哲学講義』の初版原書をパリで入手して送ってほしい、というものでした。今回の書簡にはその様子が記されており、実際に依頼を受けて対応したことがわかります。下出は大正12年の関東大震災で書籍が焼失したため再び収集しており、依頼したのはそのためと思われます。この書籍は現在、東京大学社会学研究室の下出文庫の一冊として蔵書されています。

## 2 『孤絶』『巴里に死す』執筆の頃

「孤絶」を執筆したのは昭和16(1941)年。12月8日の太平洋戦争開戦直前2か月前10月から『文学界』に連載されました。『巴里に死す』は同じ時期に執筆され、17(1942)年1月から『婦人公論』に1年間連載されました。この頃、自宅を沼津中学出身の第一高等学校の学生などの若者を対象に開放していました。やがて、その教え子が次々に出征し、なかには帰らぬ者もいました。戦中に記した日記には、それぞれの執筆状況もたびたび記されています。この日記は、『芹沢光治良戦中戦後日記』(平成27(2015)年 勉誠出版)として書籍化されています。例えば、昭和17年3月5日の日記では、「孤絶」の執筆を記していますが、東京に初めて空襲警報があった日のもので、このような戦時下に書かれた作品です。

『孤絶』と『巴里に死す』に共通するのは、軍部の検閲が厳しくなる中、作品内で表面的にはそうとは明言していませんが、根底にあるのは生命の大切さ、生きる事の大事さを訴えていることです。戦時下で、自分とその家族の命も危うく、また、教え子が相次いで亡くなるなか、その思いは切実であったのでしょう。執筆した時期と作品内容は密接にかかわっていると考えられます。

## 3 第1回展示について

展示では、『孤絶』作品内の時系列にそって、通学したパリ大学、下宿したパリのボアロー街のボングラン夫人宅、パリで触れた演劇、音楽、美術などの文化、第一子の誕生や肺結核の罹患と闘病生活についてなどを、それぞれに関連する資料を通して紹介しました。ただし、実際の光治良と区別してほしいので、各資料に断り書きをしました。

『孤絶』の冒頭には、主人公〈私〉は作家に成れずに亡くなった、という設定で、明らかにフィクションであることを意味する断り書きがあります。実際の出来事はあくまで作品の素材として使用しているに過ぎません。また、主人公の妻・〈A子〉は、自分の妻のことではない、という断り書きでもあります。展示では、最初にこの冒頭頁を展示しました。この作品で必ず読んで欲しいところでもあります。

経済学を学びながら、残された日付などを見ると主に結核に罹る前、演劇によく通いました。光治良本人が記した絵葉書によると、土日は大抵劇場に通って研究していたようです。このため、演劇のパフレットや写真が多数残されていると考えられます。特に座長・俳優のルイ・ジューヴェ、ピトエフ夫妻との関係が深かったようで、その主宰する劇の写真や発行冊子、プログラムが多数あります。展

示で紹介した物はその一部です。絵画についてはこれといった資料が残されていないのですが、随筆などをみると、演劇、クラシック音楽コンサートのほか、美術館や美術展にも頻繁に通ったようです。

留学中の出来事で外せないのが、子供が生まれたことです。長女・万里子がパリで生まれました。『孤絶』の場合、主人公と同じく娘が生まれますが、さらっと書いてあり、この部分が『巴里に死す』とも描写が異なるようです。あまり比重を置いていない。あくまで主人公自身の話に重きを置いています。さて、光治良は、「マリー・フランシーヌの日誌」と題して万里子の成長記録を綴った絵葉書を多数残しています。第2回企画展で展示しておりますが、療養中には、「マリーに残す言葉」というふうに一時的に名称を変えており、一種遺言めいた書き方にかかります。

もう一つの出来事は、結核に罹ったということ。最初肺炎になったのですが検査で結核だと判明した。それで転地療法をするためにパリでの入院後、フォンテンブロー、スイス・コー、フランス・オートヴィルの各ホテルで療養しました。その間、金江と一緒に滞在し、万里子はフォンテンブローにある託児所に預けています。

光治良は、この療養中に作家を志します。始めは帰国後の仕事として演劇の作家(戯曲家)を考えていたようです。病をかかえているなかで、また家族もいる中で出来そうな仕事を考えての決断だったのではないかと考えられます。この間、『名古屋新聞』に療養生活を記した随筆を寄稿したり、帰国後の仕事を見越しての準備としてフランス語書籍などを翻訳して過ごしています。仕事をしていながらの療養で、昭和5(1930)年の作家デビュー前から作品を書くことをしていました。

『孤絶』は、あくまで作品なので完全にフィクションとわかる部分もあります。例えば最後の場面で、主人公は、一人でオートヴィルに向かう、滞在するように描かれていますが、実際の光治良は夫婦で滞在しています。(ただし、続編『離愁』では、後から妻・〈A子〉が主人公を追ってきています。)作品内で主人公の孤独感を強調する意味があったのだらうと考えられます。以上が第1回の展示内容です。

## 4 第2回展示について

光治良のフランス留学時期のうち、昭和2(1927)～3(1928)年のフランス・オートヴィルでの療養生活から帰国するまでと、『孤絶』の続編『離愁』、同じくフランス留学時期を基に描いた『巴里に死す』を特集しています。『離愁』については、物語内容に沿って、関連する資

料を展示し、『巴里に死す』については、執筆時代の背景、刊行後の影響、フランス語訳が出版されてヨーロッパで多くの読者を獲得したことや、それによって後年にフランスの文化芸術勲章（コマンドゥール）を受章したことなど、海外での反響までも紹介しています。

展示中の主な資料として、留学時期に交流した人物の書簡資料のうち、社会学者・下出準吉宛の芹沢光治良が記した葉書と書簡4点は本邦初公開となります。内容は、社会学に関するフランス語原書を光治良に探してほしいという依頼の回答や、療養を経て作家を志す心境の変化などを記したものです。

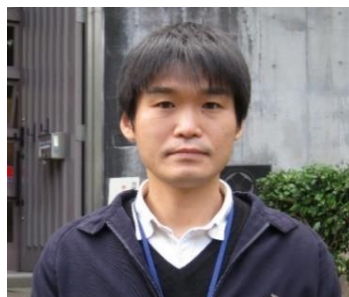
また、第1回に続き、留学時期に交流した人物として、社会運動家の石川三四郎、ジャック・ルクリュ、椎名其二や、画家の佐伯祐三を取り上げています。石川は、渡欧直前の光治良に、自身がフランスで世話になったルクリュ家への紹介状を書いており、今回展示した書簡（本庄市立図書館所蔵）では、そのことがしたためられています。ジャック・ルクリュは、社会運動家一族としてフランスで高名なルクリュ家の一人で光治良の妻・金江のピアノの家庭教師を務めた人物です。晩年亡くなるまで芹沢家と親交を続けました。今回、ジャックと関係が深い、コルネリッサン夫人が記したと思われる書簡の下書きを展示しています。これは、光治良が、帰国の4ヶ月ほど前に演劇の座長を務めていたガストン・バティとの面会を求めるもので、筆跡から恐らく光治良がコルネリッサン夫人に依頼して書かれたものです。詳細は不明ですが、帰国後に築地小劇場に携わる仕事を考えていたことが文面からわかります。椎名其二は、光治良とルクリュ家を通じて出会い、戦後に仏語訳『巴里に死す』が刊行されると、装丁をして日本にいる光治良へ贈呈しました。企画展では、椎名が記した書簡1点（当館所蔵）を展示しています。内容は、病床にあった佐伯祐三の容態を知らせるものです。また、椎名が大杉栄の後を継いで翻訳をてがけた『昆虫記』（アンリ・ファブル著 新潮社記念文学館所蔵）を展示しています。画家の佐伯祐三とは、帰国に際しその費用を光治良が工面し、代わりに作品が贈られたという関係があります。今回の展示資料では、後年の随筆「これも純粹ですか」に描かれている、光治良夫妻が、その佐伯の帰国に際し、一家を演劇『モザール』（モーツァルト）に招待したとされる演劇のパンフレットがあります。

また、『巴里に死す』を特集する中では、特に椎名其二が装丁した仏語訳『巴里に死す』（1953年 ロベール・ラフォン社 芹沢光治良記念会所蔵）があります。椎名は戦

後にパリで製本業を営んでおり、この書籍の前見返し下部には、〈SHIINA〉とあり、椎名が装丁したことを示した刻印があります。いずれの資料も、光治良が留学当時に何をしていたのか、あるいは考えていたのか、誰と交流し、どのような関係があったのかなどを知る手がかりとなるものです。

以上、第1回で展示した資料と第2回で新しく展示した資料を基に、実際の光治良の留学時代と、それを基に創作した作品『孤絶』などを紹介しました。光治良は、留学時代に様々な人と交流し、それが作家になって以降も影響しています。また、結核と療養体験を経て、作家を志す重要な時期であり、雇っていなければ作家になっていなかったとも考えられます。フランス留学が光治良という人間・作家を形成するうえで必要な経験であったと言えるでしょう。

今回、展示した実資料を実際にご覧いただき、光治良の留学時期について理解を深めていただく、あるいは作品をお読みいただくきっかけとなりましたならば幸いです。



※ けんもち なおき

沼津市芹沢光治良記念館 副主任

2005年 東北大学文学部人文社会学科卒業  
(博物館学芸員資格取得)

2007年 沼津市役所入庁

2009年 沼津市芹沢光治良記念館

2022年 同館副主任

## 植松靖博さんの思い出

植松靖博様が、本年5月18日、ご逝去されました。

靖博様は、生前、当会会員としてさまざまな活動にご参加くださいました。

植松家文書のなかから発見された、長唄本の史料的意義の調査を経て、復曲、演奏に漕ぎつけられました。そのご苦勞の一端を、本会定例会でも、ご講演下さいました。本会へのご尽力に厚くお礼申し上げます、ご浄福をお祈りいたします。

(役員一同)

## 天野 博人 さん(顧問)

植松靖博さんは、現役引退後、原の素封家植松家の13代当主に着かれ、植松家の代々に亘る歴史的遺産の継承にご尽力されました。

代表的なものとして名庭園「帯笑園」の保存です。沼津市に寄贈、その保存方法について、植松氏の熱い思いを語られたのが思い出されます。家屋の柱・壁・畳、草木の各々、庭石……。

また、歴史的保存書物を紐解く中、長唄「駿河土産」を発見、譜本がないため色々な著名な方々のご助力により復曲、そのお披露目演奏会をこの一月に開催、大好評を得たものでした。

間質性肺炎を患われ、己の命の短さを知る中での偉業です。生き甲斐としてきた物の達成感のなか、さぞご満足の内に旅立たれたことと思います。近いうちに、実証の世界でお会いいたしましょう。合掌。

(あまの ひろと 沼津市)

## 和田 萬理子さん

植松靖博様が、5月18日ご逝去されました。

帯笑園の当主として東京から戻られ、長唄の公演にご尽力されました。

様々な資料の整理をされていました。次の干支までは生きていたいとおっしゃっていました。(合掌)

夫安弘と同じ音の靖博様、干支も同じ。(芹沢光治良)文学(愛好)会にも快く入会して頂きました。

東京海上の仲澤君と友達。彼は早く亡くなっていたが、旅行やゴルフを一緒にしていた仲間。

様々な縁が繋がっています。

芹沢文学は、一人暮らしの支えとなっています。

(わだ まりこ 沼津市)

## 村松 和子さん

帯笑園 植松家13代当主植松靖博さんの突然の訃報に驚き、心痛みました。

長唄復曲のご苦勞のお話を伺い、演奏会のご案内を頂いたのが最後になりました。邦楽には縁のない私でしたが、演奏がはじまりますとごく自然に導かれました。また音曲の素晴らしさも味わせていただきました。

いつも穏やかな表情が思い出されます。

これも芹沢文学でのご縁のおかげです。植松さんはじめ会員の皆さまに感謝申し上げます。

(むらまつ かずこ 沼津市)

**Impressions** 会員からのメッセージ

**高田 博次さん** 芹沢文学と『死者との対話』について



「死者は生き残った人の記憶のなかにしか生存できないという。人の記憶は時とともにうすれて、やがて死者も生き残った人の記憶に存在することが難しくなるであろうし、生き残った人自身、この世を去ってしまう時が来るが、その時死者がこの世にかけた願望や精神はどうなるのであろうか。」

芹沢文学の短編『死者との対話』の冒頭の言葉。親しかった一高生の戦没者の手記（『きけわだつみのこえ』）に触れる冒頭に書かれた言葉です。

そもそも、芹沢文学精神には「文学は、物言わぬ神の意思に、言葉を与えるものである」ということがあり、論点は異なりますが、私自身には『死者との対話』は、精神の底にあるともいわれる魂をとりあげ考えられているという印象があります。

他方、最近とくに沼津の芹沢文学愛好会の読書会や我入道の記念館での朗読や音楽イベントなど、一般の普及活動にも参加していると、世代間にわたる「芹沢文学のバトン渡し」の実践の瞬間に立ち会っているという実感がありません。

(たかだ ひろつぐ 横浜市)

**芹澤 守さん**



『人間の意志』を再読しました。我入道出身の東大生が昭和32年の春に突然尋ねて来て、三菱銀行に入りたいので就職の身元引受人になって欲しいと頼んできた。与三郎こと芹澤正氏は銀行員となる強い遺志を持ち続け、55歳で取締役、60歳で専務になった。

若い日、フランスで夢を誓い合った4人の友人、それと光治良先生の90年の人生が縦横に織り交ぜられた、人間の成長が描かれている作品です。

(せりざわ まもる 沼津市)

**山田 本平さん**



光治良が、自分ではなく、読み手や聞き手が喜び、感心し、幸せになること（こそ）が大事だ、と書いていたことが思い出されます。

《参考》 「(これまで、)自分のためにしか書かない小説を世間に発表したのは、若さの名譽心からであつたが、それにもまして、自分は多くの人に代つて行をするのであり、祭壇にのぼるのであるといふ自負心があつたからである。」「しかし、この書物におさめた作品のあるものを創作する頃から、小説は他人のために書くものであるといふ意識を熾(さかん)にしなければならぬと考へた。それではなければ、年をとるとともに、私は小説を書く必要と歡喜をなくしさうな疑懼を感じた。自らの心に描いて解決し、たのしめば足りることになりさうな危険があつた。そこで、アルチザン(工匠・職人)としての自分を、創作にあたつて強いる必要を感じたとも云へよう。」(芹澤光治良『眠られぬ夜』「跋」昭14.9.25.實業之日本社。353-4頁)

(やまだ もとへい 沼津市)

**不破 久温さん**



『巴里に死す』を仏訳した森有正氏と光治良の交流に関心があります。当時、森氏はどのような観点で光治良の作品を読み、翻訳したのでしょうか。

光治良自身の「あとがき」や菅野昭正氏の『人間の運命』推薦文などから、森氏の「読み」を想像してきました。過去に何度か読んだ森氏の『生きることと考えること』に、自身の言葉で、「(パリの日本)大使館から、芹沢さんの小説を訳せば……といわれ、引き受けた」と述べているのを見つけました。森氏は、日本文学の仏訳の仕事が日仏の言葉の差や文化の違いを考える契機になったと述懐しておられます。森氏の『砂漠に向かって』を読むと、森氏と菅野氏の深くなが交流にも感慨を覚えます。ではいっぽう、光治良は森氏の著作を読み、共感したところがあったのか。興味は尽きません。

(ふわ ひさよし 沼津市)



植物学者牧野富太郎と祖父前田千寸との関係

顧問 天野 博人



この4月に始まった、NHK 連続ドラマ「らんまん」は、牧野富太郎植物学者をモデルとした物語である。

牧野氏は、前田が大変お世話になり影響を受けた人物で、毎日欠かさずテレビを見るのを楽しみに致

しております。

二人は、ともに高知県出身で高知市を挟んで東西の丁度等距離に生地があります。年齢は、牧野氏が18歳年長、芹沢光治良と前田が16歳差。似ております。明治維新を挟んで文明開化、皆、大望を抱いて、中央へ中央へ出奔した時代、前田も多分に牧野氏に影響を受けて美校に入学したようです。

美校時代、大変な苦学生となり、食べるものにも窮し、いつもひもじい思いをし、アルバイトをしたくも今と違って無く、同郷のよしみもあり、牧野氏の植物画の模写をさせていただき、その日暮らしの足しにしたとの事。

もとより美校でも卒論に当たる日本画の作品、天平時代の官女群が今でも芸大の画集に残っている位の腕前、それが認められ牧野富太郎が編纂した植物図鑑には、自作の植物画（ポタニカルアート）を図版に使用しているが、その一部を描いたようである。

前田は、明治43年(1910)から文明史に興味を持ち、古代から律令制崩壊期、所謂平安朝末期までの色彩文化史を体系付ける事を目的に、古代色42色の復元を昭和35年(1960)に完成。実に半世紀にわたる研究成果を「日本色彩文化史」として発表し、同年人生の幕を閉じたのである。この研究に当たっては多数の方々の、ご指導・ご援助・ご助言をいただいている。中でも植物の考察には植物学者牧野富太郎博士のご助言を何度となくいただいている。前田が研究に使った植物は画集として描かれているが、精緻を極めたもので実物そのものである。これも美校時代に牧野博士のお手伝いをさせていただいた賜物であろう。

(あまの ひろと 沼津市)

30年、100年、127年、この機会に

役員・副代表 芹沢 光治



芹沢光治良の命日(3月23日)を前に、沼津芹沢光治良文学愛好会の主催で「光治良忌」を開催しました(3月11日)。

当日は好天にめぐまれ、中瀬町の沼津市営墓地には、約40の方が来苑、献花して下さいました。なが年お会いできなかった方にも久しぶりのご挨拶ができました。まことに有難いことです。

光治良の四女、岡玲子大祖母(故人)の長女の岡寿里氏も、いま住んでいる米国から出張帰国しており、沼津まで来てくれました。そして、「世の中の情勢は不安定だが、こんな時にこそ光治良の文学を読んで、得るもの、気付くものがあれば、と願っている。」と 参列者のみなさまに挨拶をしてくれました。

私の孫の朗(あきら・6歳)、涼介(りょうすけ・4歳)、渚(なぎさ・3歳)、芽奈(めいな・2歳)も献花させて頂きました。

私は光治良の3代あとになりますので、3人の孫たちは光治良から数えて5代目にあたります。皆が揃って墓参することができ、「光治良忌」の縁(ゆかり)を実感しました。

ことは、光治良の没後30年にあたります。また、沼津市制100周年でもあります。愛好会としても「作品の愛好」のしかたを工夫し、生誕127年になる芹沢光治良の作品を、読む、聴く、見る、語る、などの機会をつくりたいと思います。どうか、みなさまの積極的なご参加、ご支援をお願い致します。

私も、この機会に、むかし読んだ光治良作品の頁を、再びめくってみたいと思っています。

(せりぎわ こうじ 沼津市)

この一年をふり返って

役員・会計担当 五十嵐 由子



岡玲子氏、和田安弘氏が相次いで亡くなられて、はや二年が経とうとしています。

沼津の愛好会も、新たに発足し二度の光治

良忌を迎えました。

作家芹沢光治良の作品を後世の方々に伝える事に尽力された岡氏を失い、財団や他の関係の皆様も、オカロスの空白感の中でご苦労された事と思います。

わが沼津芹沢光治良文学愛好会も、会そのものの存続の有無から始まり、岡氏の遺志である芹沢光治良の顕彰と多くの方々若い方々への伝承をテーマに、何が出来るのか模索した一年でした。

「一日を生涯として生きる」 一日一日を大切に悔いの無い充実した生き方をして欲しい。それが若い人に向けた光治良の願いだと思っております。

惜しまずに学んだ学問や芸術は視野を広げ、心の機微を慮り、人生を豊かに楽しくしてくれる。光治良の作品と人生からその事を知って欲しいと思います。

愛好会として、世界の老若男女に伝えていきたい目標ははっきりしていますが、なかなか結果に結びつかないことはあります。ただ留まる訳にはいきません。光治良の教えは、日々努力する事ですから。

私自身も光治良作品に触れて、精進していきたいと思っております。

(いがらし ゆうこ 沼津市)

(報告) 活動記録

事務局

2022年4月17日	第111回	企画展『芹沢光治良と人間の運命(2)』解説	劔持直樹氏
2022年5月21日	第112回	復刻版『緑の校庭』をめぐる対話会	事務局
2022年6月19日	第113回	芹沢光治良先生と「過去」「現在」「未来」の私	折笠公德氏
2022年7月16日	第114回	企画展『光治良の欧州体験(1)』解説	劔持直樹氏
2022年8月		休 会	
2022年9月18日	第115回	『人間の運命』(1-2巻)を読み直す ふる里我入道の森次郎	事務局
2022年10月16日	第116回	芹沢光治良と白隠禅師	高田博次氏
2022年11月20日	第117回	帯笑園一音の遺産	植松靖博氏
2022年12月17日		光治良の欧州体験 企画展1・2 概要 講演聴講	劔持直樹氏
2022年12月18日	第118回	芹沢光治良作品の朗読を聴く会 ゲスト：関谷昭夫氏、関谷恵生子氏	
2022年12月21日		沼津市立高等学校・中等部 芹沢作品対話会	事務局
2023年1月		休 会	
2023年2月11日		静岡県立沼津東高等学校 芹沢作品対話会	事務局
2023年2月19日	第119回	前田千寸の思い出	天野博人氏
2023年3月11日	第120回	光治良忌 (於沼津市営墓地)	事務局
2023年4月22日	第121回	『神の計画』第1・2章を巡る対話会	事務局
2023年5月4日	第122回	生誕127年 芹沢光治良を偲ぶ会 ゲスト：江藤幸氏、及川智史氏	

沼津芹沢光治良文学愛好会は、作家芹沢光治良とその作品の魅力味わい、多くのかたに伝えることを活動目標にしています。2022年度は、会員以外の方に、芹沢作品に触れて頂こうとイベントを企画しました。ひとつは、高校生のみなさんに芹沢作品を読んで会員と「作品をめぐる対話」、ふたつめには、芹沢作品の朗読会で「ゲストが作品

を読む声」を聴き、作品に縁のある音楽も聴いて頂く企画です。どちらも、ひたすら目で文字を追う黙読とは違う経験だと捉えています。参加者からもご好評を得ました。

2023年度も光治良の魅力に触れる催事を企画します。

2022年度決算報告・2023年度予算の提案

以下の決算案・予算案を6月の会員総会に提案致します。

単位：円		A	B	C=A-B	D	E=D-A
		2022年度 実績	2022年度 予算	予実算差	2023年度 予算(案)	増減
<b>収入の部</b>						
期首現金		23,082	23,082	0	94,316	71,234
一般会費	一般会員会費	72,000	80,000	-8,000	80,000	8,000
賛助会費	賛助会員会費	205,000	200,000	5,000	120,000	-85,000
寄附金等		10,000	10,000	0	0	-10,000
<b>収入計</b>		<b>310,082</b>	<b>313,082</b>	<b>-3,000</b>	<b>294,316</b>	<b>-15,766</b>
<b>支出の部</b>						
通信費・活動費	資料郵送	39,286	60,000	-20,714	50,000	10,714
会報発行費	印刷費	13,614	50,000	-36,386	20,000	6,386
複写費・什器	資料複写費	78,071	50,000	28,071	60,000	-18,071
茶菓代・雑費		34,855	10,000	24,855	30,000	-4,855
行事費	催事用資材	11,500	20,000	-8,500	10,000	-1,500
会費	関係団体会費	10,000	10,000	0	0	-10,000
書籍・著作権料	書籍代等	28,440	0	28,440	30,000	1,560
<b>支出計</b>		<b>215,766</b>	<b>200,000</b>	<b>15,766</b>	<b>200,000</b>	<b>-15,766</b>
<b>期末現金</b>		<b>94,316</b>	<b>113,082</b>	<b>-18,766</b>	<b>94,316</b>	<b>0</b>

【編集後記】「会報 いのちのふる里」(2023年6月)をお届け致します。▷巻頭論文を執筆下さった沼津市芹沢光治良記念館 剣持直樹副主任さま、「会員からのメッセージ」に寄稿下さった会員の皆さまに厚くお礼申し上げます。▷当会会員として活動にご参加下さった植松靖博さまが去る5月18日逝去されました。寄せられた追悼の言葉を集めて掲載させて頂きました。植松様のご冥福をお祈り申し上げます。▷会員の皆様には、昨年12月の「朗読を聴く会」、ことし1月の沼津市主催「文学講演会」、3月の「光治良忌」、5月の「芹沢光治良光治良を偲ぶ会」でお手伝いを頂き有難うございました。お陰様で延べ300人近いご参加を実現しました。▷2023年度の企画にも、どうぞご参加下さい。(温)

【会員 (2023.6.1.敬称略)】

《一般会員》天野博人、五十嵐由子、池谷晶子、伊東啓二、太田誠子、折笠公德、川口孝博、佐々木泰樹、清水友賀、芹沢光治、芹沢守、高田博次、中村朗、仁王一成、不破久温、村松和子、山田本平、渡邊郁子、和田萬理子 (19名)

《賛助会員》天野博人、天野富士人、天野義人、井口賢明、井口美哉子、石坂良晴、江川富士夫、加藤元章、木村博彦、斎藤美佐子、下田城二、杉山尚、関谷昭夫、関谷恵生子、芹沢ひとみ、高田博次、田島美和、津田実津公、畠真、原田雅弘、不破公美、不破久温、前田豊、松本美保、山崎正一、山本智紀 (26名、うち3名は一般会員としても登録。)

★ 一般会員 (年会費 4,000円)、賛助会員 (一口 5,000円) としてご入会・ご賛助下さる方を歓迎いたします。

発行日 2023年6月30日

発行 沼津芹沢光治良文学愛好会 〒410-0830 沼津市我入道東町151-1 芹沢方 電話 090-7855-4229

印刷製本 有限会社 報文社 沼津市八幡町27-6